



漢方で頻繁に使われる柴胡。解熱や肝機能の調整などに薬効がある。

サポニンの物質変化と有効性に着目

有効性に

科学の光を

H子さんのご主人は、肺気腫(しゅ)という持病を持っていたが、長年漢方を愛用しながら楽しんで商売をしていた。ところが今度は、H子さんにトラブルが起きた。かーつと熱くなり、上半身が火照り、寝汗もあり、額に汗をかくというのである。更年期にはよくある症状なのだが、年齢七十二歳となると「ん？」と考へ込まざるをえない。既に三カ月近くがたち、いろいろな治療を受けたという。

考え方によつては、七十二歳で更年期の症状が出たということ、最近の日本人が二十歳も若くなっているのですよ、という証になろう。

不眠や不安、軽い動悸(どつき)、小便が少ない、上半身特に頭に汗をかくーなどの症状のうち、二つか三つがそろえば用いてよい薬である。柴胡(さいこ)を用いた薬を漢方では「柴胡剤」と称して多用している。本欄でも小柴胡湯、大柴胡湯などがしばしば登場している。

漢方薬の中で最も多用する柴胡剤は、その有効性の現代医学的裏付けについて、たくさん論文・文献がある。そのほとんどが、柴胡に含まれる「サポニン」という物質の変化と有効性を述べている。サポニンは泡の出る成分であるから、「泡で体の中を洗う」という意味もあろう。

実際、柴胡剤の多くは、漢方ではいる少陽の部位(ろつ骨内に囲われている臓器)のほとんどの「消炎や抗アレルギー」を目的に使われてきた。柴胡と黄芩(おうごん)が処方の中で組んであるのは、そうした意味を持つ。

柴胡は、セリ科の多年草でその根茎を用いる。根茎部で最もサポニンが多いところは、ひげ根の部分なのである。ところが、神農本草経という古典にも「ひげ根を用いよ」とは書いておらず、漢方ではひげ根を除去して用いてきた。

長年漢方に親しんでいると、日常用いる柴胡剤の有効性はサポニンを主とすることは分かるが、それだけでは説明のつかない複雑さがミステリーとなる。

H子さんのケースはほんの一例に過ぎない。そのあたりの複雑さを「科学的でない」と避けて通る人もいるが、そうであるからこそ、科学の光を当てて効果を解明するという魅力がある。